農は国の本なり。
その姿を立体的に
示すことを通じて
保守思想を語る。

「農」を語る

荒谷 卓×小野耕資

第❶回「武」に通ずる「農」



日本再生に向けた「在所共同体」の実践

小野▼今回は、元陸上自衛官で武道家の荒谷卓さんにお越しいただきました。最初に、荒谷さんが設立された「熊野飛鳥むすびの里」とはどのような活動なのか、またどのような趣旨で作られたのかをお伺いできればと思います。

荒谷▼社会がこれだけ非日本化してしまいましたので、日本の再生をどのように進めるかということを思案した結果、「在所共同体」づくりから始めていくことにしました。それが、国内のどこにおいても、その地域を愛し、その共同体を地道に支える市井（しせい）の人々を天皇陛下がしろしめす国体を再建する上で一番の近道になるのではないかという思いから始めました。構想自体は三十年以上前からしていましたね。

小野▼荒谷先生は秋田県のご出身ですが、なぜ三重県の熊野飛鳥という土地を選ばれたのでしょうか。

荒谷▼もちろん地元でやることも考えたのですが、実は僕の田舎はもう廃村になっているんです。そういうわけで諦めて、全国各地をいろいろと探して回ったのですが、結論からいうと、熊野飛鳥を選んだのは本当に偶然です。武道や農業ができる基盤を探していたところ、熊野の飛鳥というところにたまたまぶつかったわけです。最初は「えらい遠いところだな。きっと不便だろうな」と思いましたね。

もともと東京に住みながら場所を探していた時に気づいたことがあります。例えば房総半島や伊豆半島あたりにもいいところはたくさんあるのですが、そういう場所だと東京の人は日帰りしてしまうということです。そうすると共同体ができない。逆に、不便なところは否が応でも寝泊りしないといけません。その寝泊りが大事で、そうするとご飯を一緒に食べて、お酒を飲んでとことん話して、ついでにちょっと仕事を手伝おうかと思うようになる。そうやって共同体の仕事を手伝っているうちにこのまま住もうかなと思ったりもするわけです。

小野▼風景の美しさという面でも感覚に合ったのでしょうか。

荒谷▼美しいというよりも、神々しいという印象ですね。単に風景が綺麗だとか、いい人がいるところはたくさんあったのですが、「神様がいる」と感じたのが熊野だったんです。僕はスピリチュアルな能力はありませんが、それでも感じましたね。

小野▼私も二回、むすびの里に行かせていただきましたが、川が近くを流れていて非常に綺麗ですし、里の隣に小さい神社があって、非常に樹齢の長い太い木に囲まれていて、確かに神々しさを感じる空間だと思いました。

むすびの里には一緒に生活をしている人がいるのでしょ

うか。それとも、外から来た人が何かしらの体験をするような場所なのでしょうか。

荒谷▼いろいろなケースがあります。住み込みで日々の衣食住をともにする人や、同じ集落に住み着いている人、近くの集落に引っ越してきている人、あるいは引っ越しはしていなくても頻繁に来て一緒に仕事をする人など、いろんな方がいらっしゃいます。

小野▼今の熊野飛鳥の中には、荒谷先生とのご縁で住んでいる方もたくさんいらっしゃるのでしょうか。

荒谷▼十軒以上は住み着いていますね。熊野市全体まで範囲を広げるともっといます。

全国各地の拠点づくりと新憲法の構想

小野▼新規に移住して共同体を作っていく場合、例えば昔からずっと住んでいた方から違和感を持たれるようなことはないのでしょうか。おそらく、同じようなことをやりたいと思ってもそういう点を心配している方も多い気がします。

荒谷▼そこはとても大事な点です。往々にして移住者だけで集まることがあるのですが、それだとダメですね。やはりよそ者ですから、基本的にはその土地の年寄りをちゃんと尊重して、その村のルールに従うというのが在所共同体を作る上でとても大事なことだと思います。

特に都会の人だと、突然集落に来て「自然は素晴らしい」とか「脱グローバリゼーションだ」とか言って勝手に何か始めたりするのだけれど、それはよくないと思います。まずはその土地にちゃんと馴染んで、土地の一員になっていくということをしっかりとやるべきですね。

小野▼逆にいうと、そういうプロセスを踏んでいくとその土地の住民になれるということでしょうか。

荒谷▼そうですね。その土地のために一生懸命頑張っている姿を示せば、田舎の人はちゃんと面倒を見てくれます。

むすびの里は今年で八年目ですが、世の中の情勢もかなり切迫してきたので、今年から各都道府県に少なくとも一か所以上の在所共同体を創設することを目指しています。四月から始めて現時点（六月現在）で三十を超えたので、年内には全都道府県に一か所以上、全部で五十か所以上はで



荒谷 卓（あらや・たかし）

昭和34年秋田県生まれ。東京理科大学卒業後、57年、陸上自衛隊入隊。陸上幕僚監部防衛部、防衛庁防衛政策局戦略研究室勤務の後、米国特殊作戦学校への留学を経て、帰国後に特殊作戦群初代群長となる。研究本部研究室長を最後に、平成20年退官。一等陸佐。21年、明治神宮武道場「至誠館」館長に就任。30年、国際共生創成協会「熊野飛鳥むすびの里」創設。農、武、学を通じて日本文化の国内外への普及活動に取り組む。令和4年、「日本自治集団」創設、代表に就任。著書に『サムライ精神を復活せよ!』『日本の戦闘者 現代のサムライは決してグローバリズムに屈せず』『奪われた祖国を取り戻す』など。

きると思いますし、来年はもっともっと増えると思います。

ただ、その時にはまず「今ある村落の文化伝統を基盤にして作ってください」と言っています。それから田舎の町のような場所、要するにある程度市街化している地域の場合、生産基盤を見つけたら「土地に根付いた共同体をベースにして生産基盤を共同運営できるような形に持っていってくれ」と言っています。

それから、東京や大阪のように生産基盤そのものが見つからない、あるいは探すのがとても大変な場所では、とにかくまずは人が集まって、一つの「社会」をどういう形でもいいので作ることから始めています。生産ができなければ何らかのビジネスでも構いません。その際には、例えば家族的な会社であったり、世のため人のためになる事業を共同で始めたりする形にしています。

それと同時並行でやっているのが、自分たちの国づくりのための憲法を作るということです。その憲法をどう作るかは、それぞれの自治集団の代表で決めることにしています。専門家や役人、政党ではなく、在所共同体の活動に参画している人たちで作るということです。実はもう半分以上はできています。それから、新しい政府はどうしたらいいかという「新政体構想」についても、その代表の人たちで話し合ってとりまとめを進めているところです。

小野▼そうやってローカルな活動が結びついてくると、新規の人たちが入りやすい面もありますよね。

荒谷▼全都道府県に在所共同体を作る意味もそこにあります。例えば、土地はあるけれど自分で百姓をやるのは大変だという人は、土地だけ提供してもらう。やる気はあるが場所がない人は、その土地を利用して生産基盤を作る。そうやって、在所共同体が生まれていきます。

宇宙や自然を理解するための「武」と「農」

小野▼そうした在所共同体が重要だと考えるようになったのは、自衛官時代からなのでしょうか。

荒谷▼徐々に自分の中で考えが深まっていきましたが、大学生の頃からある程度の思いは持っていました。ただ、在所共同体の考えが具体化していったのは明治神宮の至誠館館長を務めていた時期からですね。

小野▼なるほど。荒谷さんとは至誠館の館長時代からお話しさせていただいたことがありますが、当時から非常に根源的なことをお考えになっていたように思います。

至誠館はまさに明治神宮の武道場であり、荒谷さんといえば武道のイメージも非常に強いですが、武道と農の関係はどのようにお考えでしょうか。

荒谷▼僕の理解では、日本人の宇宙や自然の理解は、古事記の冒頭にある天之御中主神（アメノミナカヌシ）の話から始まっています。その中心に神産巣日神（カミムスビ）とエネルギーが集まり、そこから高御産巣日神（タカミムスビ）とエネルギーが張っていくという構造が宇宙の原理であるという理解に立っています。それは日本の国体において、しろしめす天皇が中心となって国民のエネルギーを集め、祈ることでそのエネルギーを拡張具体化するという宇宙の構造を具現していると同時に、武道においても、鹿島神流では「極めては宇宙創元の理を悟るなり」と言うように、気を臍下丹田に集め総体の力として気を張るわけです。つまり、宇宙創元の理を体感、体現できるようになることが武道の大目標であるということです。

農については、我々が宇宙の原理を日常的に体現していくことと関わりが深いんです。ですから、僕にとっては農も武も学びも全部、同じことをやっているという認識に立っています。

小野▼今、手元に荒谷先生の本があるのですが、そこには「武道の鍛錬というのは、感性を高めて悟性を開発するプロセスだ」と書かれています。武道の鍛錬も兼ねて山中にこもって稽古をして、自然の真ん中に身を置き、自然を見て聞いて嗅いで触って、地球に生きる自分、宇宙に生まれ、宇宙に生き、宇宙に死ぬ自分を感じることが大事だということを荒谷先生は書かれています。

武道というのは現代のスポーツのような勝ち負けとは違い、己の精神と肉体をそれぞれ磨き上げるものだと思うのですが、そういうものと農の精神にはつながりがあるように思います。例えば、刀を構えるのは農業で鍬を振り下ろすのと同じ足の運びだという理屈を聞いたことがあるのですが、そのあたりはいかがでしょうか。

荒谷▼農業は農業なりの技術、武道は武道の技術があるとは思いますが、僕は自衛隊に三十年近くいて、武道は半世紀ぐらい前から始め、そして十年ぐらい前からは熊野の地で百姓をやり始めました。自分で百姓をやってみると、これまで頭では理解していた農というものが体感的に少しずつ分かるようになってきました。武道を通じて「宇宙創元の理を悟る」ことをずっと目指していたのですが、今の僕は農を通じてその実感を得ています。

僕のやっている農はビジネスではなく、自分で生きていくための米を作り、余剰があれば仲間と分けて食べるという自給自足が基本です。そういうことをやっていると、生命の根源というか、大地と一体となることを通じて自然の理や宇宙の原理を体感的に味わえるような感じがするんです。

米作の前提にある社会性

小野▼いわゆる西洋近代的な考えにおける、損得や利害関係みたいなものとは違う世界があるということですね。

荒谷▼そうですね。農自体は人間一人ひとりにとっての学びそのものですが、畑作と米作で少し違うのは、お米の場合、共同で作るための基盤に乗っかっているということです。例えば水を使うとか、それから害獣対策も別々にはできないので、今でも集落でまとまってやっています。だから、自分たちの食べ物を作るための農というのは、スタートラインから社会性を持っているわけです。このあたりがとても大事だと思います。

小野▼確かに、畑は区画に分ければ個人でもできますが、田んぼは水を川から引いてくる時には集落と切り離せないですからね。

荒谷▼水源まで全部自分の私有地として持っているような人もいるでしょうが、基本的にはそうではないですよね。自然の水を集めて皆で共有して使うところから始まりますから。それから集落で米を作る以上、隣の田んぼと自分の田んぼはくっついていて、水は上から下に流れてくるので、お付き合いなくしてはできない仕組みになっているわけです。

小野▼実際に田んぼをやられる時には地域住民の方と調整することもあるのでしょうか。

荒谷▼僕は熊野の飛鳥町にある本郷という集落で「本郷農業保全会」というものを作り、その会長をやっています。周りは八十歳や九十歳の人ばかりなのですが、そこで最初にやる仕事は全員で水路の掃除をすることなんです。一年間の農業の段取りを皆で合わせて、共有している場所の草刈りをいつするかといったことを決めていきます。もちろん会社のように計画を作るわけではないですが、阿吽の呼吸で「あれをやろう」「これをやろう」という感じで、皆で集まってやっています。

小野▼なるほど。最近は農薬の問題もありますよね。近くの人間が農薬を使うと周りに影響するとか、一人だけ農薬をやめるわけにもいかないといったことを聞いたことがあるのですが、そのあたりはどうでしょうか。

荒谷▼僕がもともと農業を始めた根本的な目的は、日本再建の基盤となる在所共同体、地域の共同体を作るということなので、自然農かどうかというのは特に気にしていません。もちろん、近代化以前にどのような農業をやっていたのかということには非常に関心があり、勉強もしていますが、一番大事なのはその集落の人たちと一緒にやっていくことです。そこで反発したり一人で勝手にやったりすると、それこそスサノオノミコトみたいな存在になってしま

いますから、集落の和を崩さないのがまずは大事だと考えています。

在所共同体に込められた「八紘為宇」の精神

小野▼荒谷先生は「八紘為宇」ということもよくおっしゃっていますよね。あまり詳しくない読者のために、その考え方を教えていただけますか。

荒谷▼僕の言う八紘為宇とは、神武天皇が大和の橿原に都を開いた時の詔（みことのり）のことです。その中に「八紘（あめのした）を掩（おお）いて宇（いえ）と為すことまたよからずや」という言葉があります。これは天の下に一つの家、あるいは一つの家族を作っていくことは良いことではないか、と国民に呼びかけられた言葉で、「日本の建国の詔」とも言われています。つまり国を一つの「家」にするということは、それ以前には地域ごとの「家々」があったということです。

戦後の教科書では縄文時代と呼ぶでしょうし、神話的にいうと大国主命の国づくりの時代ですが、全国にそれぞれ小集落があって、それが竈を一つにする大きな家（在所共同体）として存在しており、そうした地域の家は日本人にとってかけがえのないものであったわけです。ただ、バラバラに存在するよりは地域ごとの家がまとまって、もっと大きな家として国を作ったらどうかということを、神武天皇が国民に向かって呼びかけられたわけです。

だから日本は「国の家」と書いて「国家」と呼んでいるわけで、それは契約からなるネーション・ステートではないんです。個人の契約的な社会ではなく、もともとあった地域ごとの家が寄り集まって、大きな家としての国を作っていく。それが日本の建国の理念であり、国民の理想だと思います。

逆にいうと、まずはそれぞれの家が存在しないと国家を作る原点がないということになってしまいます。そういう意味で、今は家が崩れてバラバラの個人だけになっている。日本の建国理念である国家を皆で力を合わせて作っていこうという土台がなくなっている。ですから、僕は八紘為宇というものを掲げているんです。家族のような国づくりや社会づくりというのは崇高な理念だと思っているので、それを成し遂げるための基盤となる地域ごとの家、共同体を再構築していくというのが僕の考えです。

「流動性」に対抗するための「土着性」

小野▼そうした八紘為宇的な考えと昨今のグローバリズム的なものとの決定的な違いは、個人として見るか共同体として見るかという点にあると思いますが、ほかに何か思い当たることはありますか。

荒谷▼今のいわゆるグローバル資本主義の社会は、主にお金に換算される資産、あるいはその資産を所有している人間を流動化させますよね。資本主義社会はこの流動性がなければ成り立たないと思うのですが、そういう無制限の流動性を生み出して、資産が特定の人間に集中できる仕組みを作ったわけです。

個人主義や自由主義、進歩主義というのは、ある個人のところに富が集まるための仕組みを作るのに都合のいい考え方であり、そういう考え方に基づいて、人とマネーを流動化させて一極集中させるということを現在の社会はやっているわけです。その結果が今の荒廃した社会につながっていると認識しています。

この問題を解決するための手段は、流動性に対して土着性を高めていくことです。つまり、何でもかんでも流動させてはいけないということです。今は土地も自然もお金で買えてしまうから、地方の土地もその地方のものでなくなってしまっていますが、そういうことをやってはいけない。土着のものを外に持ち出す個人主義的、あるいは自由主義的な考えは失敗したと認識すべきだと思っています。

小野▼あらゆるものに値札がつくのが近代資本主義の特徴であり、それは非常に問題がありますよね。西洋的には労働は罰だと考えますし、私も会社員をやっているので分かるのですが、確かに金銭労働には罰的な側面があると思うところもあります。

ある意味、労働者として働くこともお金に換えられてしまうことの一つの形態ではありますが、一方で集落のために働くということは、現代の金銭労働とは違う部分があるように思います。日本の場合、皇室の先祖に当たる神話の時代から、共同体のための労働をしていたということも大きいかもしれませんね。

荒谷▼おっしゃる通りです。日本の場合、自然に社会が進んで今の国家が形成されたという認識に立っていますが、どう考えても地域ごとの共同社会がまずあって、そこから徐々に広域化してきたわけです。ですが、その広域化が西洋近代によって極端になり、おそらく社会の考え方そのものが根本から崩されてしまった。そして、先ほど言ったように地域社会を崩壊させることによって流動性を高め、個人の自由競争に社会の将来を委ねてしまっているのが今のグローバル資本主義です。

だから、そこをもう一回見直し、地域の土着性をどうやって高めていくのかということを考えていかないといけないわけです。また、土着という以上はある意味で独立して生きていく保証を得ないといけません。それは第一に衣食住の問題であり、だからこそ農は欠かせないわけです。